

# 『中等国文』(1943)の編纂過程

—「森下日記」の分析を通して—

吉田裕久

(2007年10月4日受理)

A Study of the Compilation in Chuto Kokubun (1943)  
— Through the analysis of “Morishita’s Diary”—

Hirohisa Yoshida

**Abstract.** The reality of the middle school Japanese textbooks Chuto Kokubun has not been made clear even today. Jiro Morishita is the best friend of Minoru Nishio. Nishio recommended Morishita the compiler of Chuto Kokubun. Morishita worked hard. He wrote a diary during the days. It is “Morishita’s Diary”. In this diary, he wrote the process of Chuto Kokubun. This diary is the most important material of the Japanese textbooks.

Key words: Jiro Morishita, Minoru Nishio, Chuto Kokubun, Japanese textbook for middle school, in wartime

キーワード：森下二郎，西尾実，中等国文，中等国語教科書，戦時下

## はじめに

太平洋戦争下の昭和19年度から使用され始めた『中等国文』に関しては、中等学校における最初の国定国語教科書という要所に位置する教科書でありながら、今日まで多くのことが分からないまま過ぎ去ってきている。見本本を含めて、教科書は5冊編纂されている。国立教育政策研究所教育図書館等に所蔵されているので、その中身は知ることができる。が、その趣旨や編纂の背景・過程、対象学年、使用状況など、これまでほとんど明らかにされてこなかった。当時が敗戦につながる戦時下であり混乱を極めていたため、関係資料の散逸などがその主たる理由であったと思われる。

そうした悲観的な状況の中で、極めて偶然のことながら、この『中等国文』編纂に関する資料に接する機会を得た。それも、およそ教育に無縁のところからである。ここに取り上げる森下二郎記・西尾実編『神と愛と戦争—あるキリスト者の戦中日記—』(1974. 4初版, 太平出版社)、およびその原典である「森下二郎日記」(以下、森下日記)がそれである。この二者の

関係は、後者が正本で、前者がその抄本という関係である。

本稿は、この「森下日記」の分析・検討を通して、『中等国文』の編纂過程を明らかにしようとするものである。

## 1 「森下日記」について

まず、これらの資料との出会いについて、いささか随想めぐが、この言わば希有な体験を述べておきたい。求め続けてなかなか得られない資料が、ある日突然何の前触れもなく資料の方から顔を見せてくる、そうした研究資料との不思議な遭遇の一面をよく反映しているように思うからである。

### (1) 『神と愛と戦争—あるキリスト者の戦中日記—』との遭遇

森下二郎記・西尾実編『神と愛と戦争—あるキリスト者の戦中日記—』は、太平出版社が「むなしく風化しようとする一五年戦争の体験を正しくうけつぐ作業に多少でも貢献をすることができれば」<sup>1)</sup>という趣意

に基づいて刊行した「シリーズ・戦争の証言」(全20巻)の第13巻である。これに出会ったのは、今を去ること17年も前の1990年8月のことであった。広島市立子供図書館で、児童書のコーナーを何げなく見ていたとき、西尾実の著者名がある本書が目飛び込んできた。本書を本棚から抜き出し、それこそパラパラとページを繰った。西尾実にこんな『神と愛と戦争』という著作があったのか、知らないところで多くの著作があるものだと感心した。一方で、それにしても今まで読んできた西尾実の世界とは余りにも違い過ぎると思った。西尾実とこの書名とが結ばれない。その筆頭著者である「森下二郎」の名は、それ以上に分からない。初めて目にする名前である。ところがページをめくるに従ってびっくり仰天。なんとこれまでほとんど内実がわからなかった『中等国文』の編纂に関するところが、あちこちに出ているではないか。偶然とはいえ、大変な本に行き当たったものである。さっそく本書を借りだし、関連部分を複写するとともに、この本を発注し、1989年3月発行の第七刷を入手した。

## (2) 森下二郎について

さて、森下二郎についてである。森下は、1885(明治8)年、長野県上伊那郡片桐村の農家の長男として生まれた。飯田中学校、高等師範学校を卒業して、飯田尋常高等小学校、上片桐尋常高等小学校、飯田高等女学校、長野高等女学校、長野師範学校、松本高等女学校、諏訪中学校で教鞭を執って、1943(昭和18)年に教鞭を退いた。同年、西尾実の紹介で文部省の嘱託として『中等国文』の編集に参加した。1962(昭和37)年、76歳で死去した。森下の高潔な人柄、周囲から注がれる尊敬の念については、本書および、『回想の森下先生』(刊行会編、代表・西尾実、昭和46年6月15日)、『杜鵑野に呼ばふ』(森下日誌を読む会、昭和63年12月1日)など、森下を慕う人とたちによってまとめられた遺稿集・回想集に詳しい。

## (3) 「森下日記」との直接対面

『神と愛と戦争—あるキリスト者の戦中日記—』の末尾の記述「解題 森下二郎の日記について」(清水義穂)によって、「森下日記を読む会」の存在を知る。下伊那教育会館に読み合わせの資料などが存在することが記されていたため、下伊那教育会館に電話で問い合わせる。この会を代表する下条修雄氏を紹介される。下条氏に電話し、次いで手紙を書いて、消息、経緯など、おおよそを伺う。とともに、関係資料が下伊那教育会館に存在することを教えられる。

1990(平成2)年9月29日、下伊那教育会館を訪問。

次いで、森下二郎の娘婿(森下学面)さんのお宅で、森下二郎の日記の原本を見せていただく榮に浴する。しかし、これをどう公表すべきかの方法をうまく見いだせず、常に気にはなりながら、この貴重な資料を長く眠らせたままになってしまった。大変よくしていただいた森下ご夫妻のご厚意に応えるためにも、何らかの形にせねばと思いつけてきた。

## (4) 「森下日記」の体裁と内容

### ① 対象期間・体裁

『中等国文』の編纂に関する記述が見られるのは、昭和18年4月14日から、昭和19年12月27日までの1年9ヶ月である。この間、2冊の日記帳が用いられている。前者は19年5月10日まで『昭和17年度自由日記』(博文館、15cm×21cm)に、後者は19年5月11日から大福帳式のもの(16.5cm×13.5cm)に全て達筆な筆で書かれている。

### ② 内容

日記なので個人的なその日の出来事、思いなどが綴られている。しかし、まったく個人的な備忘録でもなかったようである。西尾は、「わたしが森下君をたずねた場合、必ず見せてもらうのは、森下君が日記のようにノートに書いている随想とか試論とかいうものであった。(中略) それを読むことが楽しみであった」<sup>2)</sup>と述べている。その意味では、日記文学ならぬ日記随想、思想断片といったところか。森下はキリスト信者だったので、聖書に関すること、またそうした方面の著書からの引用なども多く見ることができる。矢内原忠雄、内村鑑三の名前が散見される。

この時期、『中等国文』の編纂に精力的に当たっていたようで(裏方作業ではあるが、ある意味ではもっとも根幹をなす部分。教科書編纂の最前線にいたことになる)、日々の暮らしの中で、その編纂作業の進捗状況、教材の選択・修正・変更など、これまで公にされてこなかった『中等国文』の編纂状況、成立過程が生言葉で詳細に語られている。言わば、国定教科書編纂の実況が生中継のような迫力さを持って伝わってくる。

## 2 森下二郎と『中等国文』

### (1) 森下二郎は、なぜ『中等国文』の編纂に関与することになったのか。

この点に関しては、森下を文部省に推薦した西尾実に、次のような回想がある。

松本高女を辞した森下君は、郷里の農業経営は弟の三郎夫妻がしっかりやっているので、わたしは東

京へ出ることを勧めた。ちょうどわたしが文部省の中等国語編集委員会の委員長に推されていたので、昔から読むべき本の発見において、読んだ本の理解と批判において、するどい直観力と深い理解力を持っている森下君を、その中等国語の編集室に迎えることは、わたしのためだけではなく、教育のためにも、森下君のためにもいいことだと信じてそれを勧めた。森下君は奥さんを連れて上京し、渋谷に一家を構え、神田岩本町に新設された中等教科書株式会社の中の中等国語編集室に出勤することになった<sup>3)</sup>。西尾と森下とは同郷の親友、行ったり来たり、助けたり助けられたりの関係であったようである。

森下は、こうして昭和18年上京、西尾を助けて文部省の嘱託として中等学校教科書株式会社国語編集室に勤務することになった。

## (2) 森下二郎は、『中等国文』の編纂にどのような立場で、どのように関与したのか。

森下二郎が上京後にすべき仕事の内容について、西尾実はあらかじめ手紙で知らせてきた。1943年3月19日の日記に、次のように見えている。

西尾君から上京後の仕事について手紙が来た。(中略) 文部省の方は四月早々発令(文部省嘱託として)の予定、巻一、二を六月末までに、巻三、四を八月末までにといふ心組であります。お願ひし度いことは材料をお選び願ったり、又教材として手入れを願ったりが主で、たまに会議に御列席願ふ程度と存じます。(中略)

文部省の中学校国語教科書編纂の仕事は有意義な仕事だから出来る限りの力を尽そうと思う。

ここに、国定教科書編纂に対する森下の意気込みを感じ取ることができる。仕事の内容としては、

- ①材料をお選び願ったり、
  - ②又教材として手入れを願ったりが主で、
  - ③たまに会議に御列席願ふ
- ということであった。

## 3 「森下日記」(『中等国文』編纂日記)の実際

それでは、肝心の「森下日記」の中から、『中等国文』編纂の関連部分を抄出する。引用であるので本来は1字下げの形式を取るべきだが、日記からの引用が明らかなので、日付を提示しながら記すことにより、その形態を取らないことにする。また、考察もその時々挿入する。したがって、以下、日記を抄出しながら、その都度、考察・気づき等を添えることにする。

なお日付に□□のあるものは原典(森下日記)にのみ掲載、日付に□□がないものは『神と愛と戦争』(pp.154~217)にも引用されているものである。

1943.4.14

午前八時十分自宅をいで、家内芳枝と共に巣鴨に至り、とげぬき地蔵尊に参詣す。それより家内にわかれ省線にて神田駅に至り、岩本町なる中等教科書株式会社に赴き、同社楼上国語編集室にて終日仕事をなす。これはこの頃来、西尾君の新制『中学校国語読本』編纂の手伝をなし始めたるがためなり。文部省嘱託として、仕事はこの中等教科書株式会社の編集室にてなすわけなり。今日は今までに読本の材料として選み置けるものを書写してもらうべく中教会社編集員の方へ渡す。《考察》いよいよ実際の任務についている。約1カ月間、事前準備として材料を集めていたことがわかる。なお、この時、教科書名は『中等国文』ではなく、『中学校国語読本』であったこともわかる。

1943.4.16

午前八時半、神田岩本町中等教科書株式会社に至り仕事をなす。万葉集抄、子規句抄、蕪村句抄、曙覧独楽吟抄をつくる。藩翰譜より材料を探す。《考察》これらの教材はすべて実際に『中等国文』巻一の教材として生かされたようである。

1943.5.1

午後神田岩本町中等教科書株式会社に行く。本日国語読本編纂会議あるはずなりしに、西尾君も他の二嘱託もついに見えず。何らかの都合ありて予定を変更したるものならん。

1943.5.4

中等教科書会社にゆき、終日『中学校国語読本』材料の書写しもらいしもの読み合せをなす。《考察》この間、五ヶ月余り、日記そのものに記述が少ない<sup>4)</sup>。したがって『中等国文』関係の記述も見られない。多忙の、充実の日々だったのか? 『中等国文』の編纂過程を知る上で、この空白は大きい。

1943.10.4

中等学校教科書株式会社に出勤。午後四時帰宅。

1943.10.14

中学校国語教科書材料、「万葉集の歌」及戯曲「名和長年」校正。

《考察》この「万葉集」は、巻一なのか巻二なのか不明。また「名和長年」は、結果的には採用されていないので、ますますこの作業がどちらの巻を対象にしたものかはっきりしない。

こども、10月下旬から11月上旬にかけて、生活面の若干の記述はあるが、『中等国文』編纂についての記述は見られない。ほぼ二ヶ月の空白である。この間、

12月14日には巻一、同31日には巻三が刊行されているが、これに対する記述もない。おそらくこの日々、巻一および巻三の編纂作業が営々として続けられていたものと思われる。

1944.1.1

大隈言道の歌集を読む。これは昨年より引続きの中等学校国語教科書へ採択せんがためなり。どうも是非採択し度しと思う様の歌見当たらず。

1944.1.2

大隈言道歌集を読む

1994.1.3

午後『大隈言道歌集』を読む。歌も沢山作れば、その中には一つや二つはよき歌も出来るものならんと思ひ居たりしが、やはり歌はその「人」の表現なればいかに多く作ればとて、その「人」だけのものにて、それ以上に特に優れたるものの出来るものにはあらざるが如し。言道の歌、一万余首、すべてみな小器用なる浅薄なるもののみなり。

《考察》ずいぶんと手厳しい。しかし、いざ教科書の教材となると、こうした慎重な態度にならざるをえなかった気持ちもよくわかる。

1944.1.4

大隈言道集のつづきを読む。

1944.1.5

中等教科書株式会社へ出勤。大隈言道集よりの選歌をなす。

1944.1.6

中教へ出勤。大隈言道集より選歌。「平家物語、經正都落」、「自然と人生抄」「征戦歌」原稿をつくる。

1944.1.7

中教へゆく。大隈言道集選歌作る。西尾君より電話あり、中等国文巻二附録へ入れる予定なりし「監視哨日記」は止めにするとのことなり。「征戦歌」原稿、中教広居氏に渡す。

《考察》森下は相談の場にはいなくて、もっぱら結果を聞き、結果に従う立場であった。

1944.1.8

中教へ出勤。「秋冬・春夏」（徳富芦花の文）原稿、中教佐藤氏に渡す。「大隈言道の歌」原稿、佐藤氏に託し、西尾君へ送る。中等国文巻三校正をなす。佐藤氏とともに。

《考察》大隈言道にこだわっている。結局、巻二の4「すすきの穂」に「ふく風に動く菜の花おともなく岡へ静けき朝ぼらけかな」他二句が採録された。

1944.1.10 月曜日

中教へ出勤。「松陰書簡」原稿をつくる。

《考察》

これは、巻四－9「松陰と家庭」のようである。

1944.1.11

中教へ出勤。午後三時半頃、西尾君中教に来られ、中教の編輯係、校正係と共に中等国文巻三の校訂をなす。

1944.1.12

中教へ出勤。中等国文巻二に用ふべき平家物語の原稿をつくる。午後、西尾君来られ、昨日の続きの校訂をなす。

1944.1.13

中教へ出勤。「松陰書簡」を徳富蘇峯著「吉田松陰」により校訂することを得たり。

《付言》この作業に平行して湯浅半月や矢内原忠雄のものを読み、かつ戦争についての感想、および孫の信一郎の心配をしている。

1994.1.15

中教へ出勤。「松陰書簡」原稿、プリントとなすため佐藤氏に渡す。中等国文巻二へ入れる材料を探すために中谷宇吉郎氏著『樹水の世界』を読む。その中の「馴鹿橋」という一篇、樺太の自然と（ブリアート）族の生活を描いて、中学一年生の読物としてよきものならんかと思はる。文章もすっきりしたよい文章である。《考察》この「馴鹿橋」は、巻二－9に採録された。なおここで『中等国文』という名称が用いられている。

1944.1.16

午前、西尾君を杉並区和泉町の自宅に訪ひ、中等国文巻二編輯につき、文部省、省内審議会の模様を聞く。和歌は良寛・元義・言道三人を束にして出す事に変更したる由。佐久良東雄の文を削除し、科学者の科学的な文を入れたしとの事。徳富芦花の文に就ては、吉田熊次博士より、あの様な自由主義の文を採つてよきかといふ注意あつたる由。大隈言道の歌に就ては、文部省井上（注：越のこと）編輯課長、島津久基博士ともに非常に賞讃し平賀元義などより遥かに上手なりといひし由。

《考察》『韓国語読本』の編纂者だった高木市之助の同様の苦勞談が想起される。「三人を束にして」とは、前述、巻二－4「すすきの穂」のこと。良寛・平賀元義・大隈言道の三人の歌で教材を構成している。佐久良東雄の文章は不明。徳富芦花の文章は2「秋から春へ」のことだと思われる。文章よりも「人」が問題だったのだろうか。なかなか思うようにはいかない現実、前途多難の相を肌で感じ取ったのではないか。

1944.1.17

中教へ出勤。中等国文巻二材料、良寛、元義、言道三人の短歌を束にしたるものをつくる。

《感想》それにしても図書館等で調べ物をする機会が少ないのは不思議である。教材案として挙がるものす

べてが手元にあるとは思えないが……

1944.1.19

中教へ出勤。西尾君来られ、昨日の文部省内審議会の模様を聞き、巻二、巻四の変更になりたる□分に就き打合せをなす。

1944.1.20

中教出勤。巻二、巻四（中等国文）新材料、「ますらを」（萬葉の歌）戯曲「楠公櫻井驛」（眞山青果作）謡曲「攝待」「君の御名残」（平家物語、経正都落の條）の原稿を、文部省編輯会議にかけけるためのプリントにする様、中教佐藤氏に渡す。

1944.1.21

中教に出勤。中等国文巻二、巻四のうち、新採用材料の校正をなす。

1944.1.22

中教出勤。中等国文巻二全部に互り校正。

1944.1.23

中等国文巻四原稿校訂をなす。

1944.1.24

中等国文巻四原稿校正をなす。

1944.1.25

中教に出勤。中等国文巻四、原稿校正。

1944.1.26

中教出勤。午後一時半西尾君来られ、中等国文巻二、全巻四原稿につき、校正其他の打合せをなす。

1944.1.27

中教出勤。中等国文巻二、調査会用プリント原稿広居氏に渡す。国語編纂室移転。午後五時帰宅。夜、中等国文巻四原稿校正をなす。

1944.2.1

中教出勤。中等国文巻二原稿中、「桜井驛」「用水」、全巻四中「摂待」は文部省に於て難色ある由。「桜井驛」「摂待」は改作、「用水」は削除する事となる。「用水」の代りには杉田玄白の蘭学事始より採る事となる。

1944.2.3

中教出勤。午後西尾君来られ、「桜井驛」及び「摂待」の改作をなす。

1944.2.4

中教出勤。中等国文巻二、巻四原稿校訂。

1944.2.5

中教出勤。中等国文巻二原稿中、「尊徳先生の幼時」及び全巻四原稿中、「松陰と家庭」校訂。中教広居氏の話に、全氏昨日文部省にて西尾先生に会いたるに次の話ありたりとのことなり。巻四材料「摂待」は取り止め、その代りに山本有三氏作「不惜身命」を取る。巻二材料「蘭学事始」杉田玄白の原文より取れるものなるが、菊池寛氏の創作「蘭学事始」と比較して、そ

の方よりよき様ならばその方を取らん。右により菊池寛氏の小説「蘭学事始」を読む。やはり原文の方よし。菊池氏の方は原文に據つてかいては居れど前野良澤と杉田玄白との人物の対立に興味を持ち、それを主題として描き出せるものにて一抹軽薄の気の漂へるを感ず。原文は文章そのものは名文とは言ひ難からんも、真実一途の気に満ち、読む者の心を打つものがある。読本へはやはり原文を取る事にしたい。

《付言》「不惜身命」は、巻五14課に採録される。

1944.2.10

中教出勤。中等国文巻四原稿「徒然草抄」プリントにして貰ふため、中教広居氏に渡す。

1944.2.12

中教出勤。中等国文巻四原稿校正。中等国文編纂趣意書同じく。

1944.2.14

中教出勤。

1944.2.15

中教出勤。中等漢文編纂趣意書校訂。

1944.2.16

中教出勤。中等国文巻二「創始者の苦心」「尊徳先生の幼時」校訂。

1944.2.17

中教出勤。中等国文巻二、「軍神の書簡」校訂。

1944.2.18

中教出勤。中等国文巻二「軍神の書簡」、中等漢文編纂趣意書校訂。

1944.2.25

中教出勤。中等国文編纂趣意書に記載すべき、採擇せる文の作者、出典を調査、作製に従ひ、湯浅常山、正岡子規、寺田寅彦、新井白石の伝記を調査、略伝作製。

1944.2.26

昨日につづき、中等国文巻一、作者・出典調査作製。中等国文巻二、調査会用プリント原稿、全巻四省内審議会用プリント原稿中教へ提出。

1944.3.3

中教出勤。中等国文巻二「長柄堤」校訂。

1944.3.4

和泉町に西尾君を訪ふ。不在。空しく帰る。

1944.3.5

午前、雪を冒して杉並区和泉町に西尾君を訪ふ。不在。空しく帰る。中等国文巻三所載萬葉集の歌「宇智の大野」作者解説をつくる。

1944.3.6

朝、雪を冒して和泉町に西尾君を訪い、中等国文編纂趣意書に関し打合せをなす。十二時少し前帰る。

1944.3.7

中教出勤。中等国文卷二、省内審議会用プリント出来。本日同巻の校正をなす。

1944.3.8

中教出勤。西尾君より手紙あり、中等国文卷三編纂趣意書を作れとの事なり。これは思い儲けぬ事にて少々困りたる心持なり。

1944.3.9

自宅にて仕事。中等国文卷三編纂趣意書作製。

1944.3.10

中等国文編纂趣意書作製意の如くならず。怏々として楽まざるものあり。中教に出勤。中等国文編纂趣意書作製遅々として進まず。焦燥を覚ゆ。

1944.3.14

中等国文卷三編纂趣意書の作製及び、訂正をなす。

午後岩本町中教へ行く。

1944.3.15

中教に出勤。中等国文三編纂趣意書作製。

1944.3.16

中教に出勤する。中等国文卷二編纂趣意書作製始む。全巻三既製分を西尾君手許へ提出す。

1944.3.17

中教出勤。西尾君より手紙来り、文部省内協議会にて、中等国文卷四中、「樹水の世界」及び「たぎりたった時代の人」が問題になり、これを改訂となりし由、また巻一編纂趣意書、第八課「戦国の武士」以下を予に作製せよとの事なり。それを作製し始めたけれど、渋滞して捗らず。

《考察》何が話題になったかはわかるが、そのどこがどう問題になったのか、その経緯がわからないのがこの資料の限界である。「戦国の武士」は、第六課である。これ以後に教材の配置に移動があったのか、記憶違いか。

1944.3.18

中等国文卷一編纂趣意書の作製をなす。

1944.3.20

中教出勤。

1944.3.22

中教出勤。中等学校教科書株式会社より昭和十八年度謝礼金として金六百円を受領。

1944.3.23

中教出勤。

1944.3.24

午前十時、中教広居君と共に文部省に到り、中等国文主査委員会に列席す。西尾君病気の為め代理なり。

委員諸橋轍次先生、久松潜一先生、中等国文女子用編纂委員島津久基先生、文部省編輯局長井上氏、監修官松田氏、全石森氏会同なり。午後三時、中等国文男子

用女子用卷二、卷四、四巻の主査終る。

《考察》『中等国文』の編集態勢がよくわかる。主査委員会の状況も推察できる。

1944.3.25

中教出勤。午後二時出かけ杉並区和泉町に西尾君を訪ひ、主査委員会の状況を報告す。

《考察》この辺りの対応は、実にこまやかで、律義である。

1944.3.28

中等国文卷一編纂趣意書、附録五「月を語る両提督」の分作製。

1944.3.29

中教出勤。中等国文卷一編纂趣意書修正。

1944.3.30

中教出勤。中等国文卷一編纂趣意書整理。

1944.4.1

中教出勤。中等国文卷一編纂趣意書整理を終り、午後三時半杉並区和泉町に西尾実君を訪ひ、これを提出す。

1944.4.2

中等国文卷二原稿校正。

1944.4.5

中教出勤。中等国文卷二原稿校正。

1944.4.6

中教出勤。中等国文卷二原稿校正。

1944.4.7

中教出勤。中等国文卷二原稿校正を終り、午後、杉並区和泉町西尾君方に到り、これを提出、午後四時帰宅。昨六日、文部省に中等国文卷二巻四調査会あり。全部大体無事通過せし由。中教会社佐藤君より□□□。

1944.4.10

中教出勤。中等国文卷四原稿校訂。

1944.4.11

中教出勤。中教編輯課国語係佐藤氏庶務課に転じ、全広居氏調査課に転じたる由、馬場氏は漢文係として旧の如しと。佐藤氏の代りは寺島氏、広居氏の代りは八尾氏。寺島氏国語係主任なる由。

1944.4.13

中教出勤。

1944.4.14

中教出勤。中等国文卷二編纂趣意書書き始む。

中教会社編輯局国語科主任寺島氏、全科員八尾氏挨拶に来る。

1944.4.15

中教出勤。

1944.4.17

今日は家居仕事をなす。中等国文卷二編纂趣意書作製。どうも自分にも趣意のはっきりしない課などあり

て、仕事渋滞遅々として進まず。

1944.4.18

中教出勤。

1944.4.19

午前中家居，中等国文卷四原稿「不惜身命」の校正をなす。午後一時，中教会社より迎ひにより，中教会社に出勤。西尾先生も来られ，中等国文卷二協議校正す。午後五時帰宅。

1944.4.20

中教出勤。中等国文卷四原稿「不惜身命」の校正を完了。同卷二編纂趣意書作製。午後五時帰宅。

1944.4.21

中教出勤。午後二時半西尾先生来られ中等国文卷二協議校正す。午後五時半帰宅。

1944.4.22

中教出勤。中等国文卷四材料「たぎりたつた時代の人」改訂原稿を校訂，中教に渡す。

1944.4.24

中教出勤。中等国文卷四，原稿校訂。

1944.4.25

中教へ出勤。

1944.4.26

中教会社へ出勤。午後三時半帰宅，それより杉並区和泉町に西尾君を訪ひ，中等国文卷四，校正原稿を渡す。

1944.4.27

中教会社出勤。

1944.4.28

中教会社出勤。中等国文卷二編纂趣意書続稿。中教編輯局国語掛の方へ火野葦平氏半間山庸夫氏の略歴調査方依頼す。午後四時帰宅。

1944.4.30

中等国文卷一，卷三校閲。

1944.5.1

中教会社に出勤。中教会社にては中等国文卷一，卷三校閲。中等国文卷四材料，「たぎりたつた時代の人」校正。中等国文卷一編纂趣意書プリント成る。

1944.5.2

午前八時中教会社出勤。中等国文卷四材料「不惜身命」プリント校正。全卷一編纂趣意書プリント校閲。全卷二編纂趣意書続稿。西尾君，鳥津氏と中教会社に会せられ，中等国文第三学年用編纂に関し打合せを行ふ。午後六時帰宅。

1944.5.3

午前九時中教会社へ出勤。中等国文卷三校閲。同卷二編纂趣意書続稿。午後五時帰宅。

1944.5.4

中教会社出勤。中等国文卷二編纂趣意書続稿。午後四

時半帰宅。

1944.5.5

中教出勤。午後三時頃帰る。

1944.5.10

中教出勤。中等国文卷二編纂趣意書原稿成る。

1944.5.11

中教会社に出勤。中等国文卷四編纂趣意書作製。

1944.5.12

中等学校教科書株式会社出勤。中等国文卷四編纂趣意書作製。

1944.5.13

午後四時杉並区和泉町に西尾君を訪ひ，中等国文卷二編纂趣意書原稿渡す。

1944.5.17

中教出勤。中等国文卷四編纂趣意書続稿。

1944.5.18

中教会社へ出勤，中等国文卷四編纂趣意書草稿を終る。午後四時半帰宅。

1944.5.19

中等国文卷四編纂趣意書草稿修補。

1944.5.20

中教会社にゆき，中等国文卷四編纂趣意書草稿修訂浄書。

1944.5.22

中教会社出勤。中等国文卷四，編纂趣意書は草稿成る。

1944.5.23

中教会社に到り，中等国文卷四編纂趣意書草稿整理。

1944.5.24

午後二時より西尾先生来り，中等国文卷五編纂会議あるはず故その終り次第（引用者注：早朝に長逝した井沢氏の弔問）行く事にす。午後四時会議終り，直ちに小岩井澤方へ赴く。

1944.5.26

中教会社出勤。中等国文卷五材料選択。十訓抄古今著聞集を探る。

1944.5.27

中教会社出勤。宇治拾遺物語及び今昔物語に中等国文卷五材料を探る。

1944.5.29

中教会社にては，中等国文卷五材料を今昔物語，宇治拾遺物語，十訓抄，古今著聞集に探る。

1944.5.30

中等国文卷五材料原稿浄書。夜，新古今和歌集を読む。これも中等国文卷五に採録すべき歌を得んがためなり。

1944.5.31

中教会社出勤。

中等国文卷五原稿説話抄を纏む。夜新古今集抜き書

き。中等国文巻五の材料なり。今日文部省にては中等国文巻二、巻四の附録は全部削除と決定したる由、今日中教官本氏より聞く。巻一、巻三にあって巻二、巻四になきは変なものなり。

〔1944.6.1〕

中教会社出勤。

古今集、新古今集、新葉集の歌を選ぶ。中等国文巻五に採録せんとてなり。

1994.6.2

中教会社出勤。中等国文巻五原稿、古今集抄、新古今集抄、新葉集抄整理。同平家物語抄考案、平重盛の条、同維盛の条、六代の条、建礼門院の条を考へたり。この中矢張り重盛の条がよかるべきか。太平記抄の案は、藤原藤房諫言の条並に隠通の条、及び金崎東宮の条なるも、藤房の条は内容が後醍醐天皇御政治を批判し奉りたるもの故、文部省にて認可すまじと思ふ。徒然草抄は道義の教訓、趣味、説話、自然と種類を別って類集して見たが、矢張り教訓と趣味とがよくなるかと思ふ。

〔1944.6.3〕

中教会社にては、中等国文巻二、印刷初校をなす。

1944.6.14

大鏡から中等国文巻五に採擇し得る處を探る。やはり、左大臣時平公の条から菅公の事を叙した部分によささうである。

〔1944.6.15〕

久し振りにて中教会社出勤。

1944.6.16

中教会社に出勤す。中等国文巻四印刷原稿、前半校正完了、中教に渡す。中等国文巻五材料「枕草子抄」をつくる。自然観察を主としたる条のみを集めて一集としたるもの。中学第三学年用としては恰当のものなりと思う。午後五時帰宅。よる、中等国文巻四印刷原稿後半校正。

1944.6.17

午前八時中教会社出勤。中等国文巻四印刷原稿、校了、中教へ渡す。中等国文巻五材料「枕草子抄」中教に託し西尾先生の処に送る。

1944.6.22

中教会社出勤。朝より眠たくて、一日ろくな仕事もせず。無為に過して午後五時帰宅。どうも身体の具合がよくない様なのと、今度の中等国文巻五編纂についてしっかりした目あてがつかないので、仕事をどうしたらいいかはっきりしないのであるためである。

1944.6.25

午前杉並区和泉町に西尾君を訪問し、中等国文巻五材料を渡す。なお同巻編纂について協議して帰る。

1944.6.26

中等国文巻五の材料をとるため、『増鏡』を読む。満足すべき採択箇所を得ず。

1944.7.5

中教会社出勤。中教寺島氏に託し、狂言「朝比奈」中等国文巻五材料、西尾先生に提出。

1944.7.8

本日終日家居、中等国文巻五の材料として、『親鸞上人全集』、道元禪師『正法眼蔵随聞記』、沢庵禪師『玲瓏随筆』、喜海『明恵上人伝記』を探りしが適當なる所を見出し得ず。ただし『明恵上人伝記』の中、上人と泰時との事を書きたる部分は好材料ならんかと思う。

1944.7.22

中教会社出勤。昨日文部省における会議において、中等国文巻五の編成、大体次の通り協定したりとの事なり。中等国文五 1、やまとうた（古今集序）2、若菜（古今集抄）3、春は曙（枕草子抄）4、恩賜の御衣（大鏡抄）5、光頼卿の参内（平治物語）6、源為朝（幸田露伴）7、天の香具山（新古今集抄）8、月の前（上田秋成）9、敷島の道（増鏡）10、吉野の奥（新葉集抄）11、言霊（井上毅）12、そろそろの道（今昔、著聞、宇治拾遺抄）13、朝比奈（狂言）14、不惜身命 15、先達（徒然草）16、奥の細道 17、城（和辻哲郎）右のうち、余の考えにては上田秋成の「月の前」及び和辻哲郎の「城」はどのように感心しないものなり。「月の前」は、事実及び性格の描写明瞭ならず、かつその思想、信念が透徹して居らざるなり。「城」は観察の機微、説明の巧妙はあるが、信念が足りない。勇気が足りない。阿世の臭いさえある。狂言の「朝比奈」も「狂言記」にあるものとは大分違っているものであって、読み物として観ては、余程力のない、諧謔の機微を逸したものとなりえている。

《考察》このリベラルな思想の持ち主が、極めてしがらみの強い仕事をよくも継続できたものである。西尾実の関係がなければ、あえてしなければならない仕事ではなかったのではないか。森下が否定的であった三教材（月の前、城、朝比奈）のうち、結果的には「月の前」は採録、後二者（城、朝比奈）は不採用、ただし「城」の代わりに同じ作者（和辻哲郎）の「固有の偉大さ」が採録されることになる。

1944.7.29

中教会社出勤。中等国文巻五材料「若菜」（古今集抄）、「季節感」（岡崎義恵）、「為朝の歌」（幸田露伴）、「成りきる心」（出隆）、プリント校正。

1944.7.31

中教会社出勤。西尾氏来社。中等国文五の材料として先日選びたる岡崎義恵氏の「季節感」についての意見



を求められる。説明はしっかりとしておれど中学三年生にとっては難解ならんト答ふ。さらば木村素衛氏の「花に寄する心」を見置けとの事なり。通読するに、案外に甘たるきものにて感心せず。やや阿世の臭気さえある心地す。

《考察》

「季節感」は採録されなかった。「花に寄する心」は女子用の巻五に採録された。

1944.8.9

三郎、今度も我等の郷里へ疎開する事を極力勧め呉れたり。これは我等も前々より考え居る所、中等国文教科書編纂の方も本年度の分は事実、もはや小生の力を要とせざる事なれば、この際疎開する事よろしからんと思う。本日、中教会社へ出勤せず。

《考察》この辺りから、森下のトーンが落ちている。自らの信念と編纂担当者との進め方との歯車がかみ合わなくなったか。

1944.8.12

中教会社出勤。今日は身体だるく精神朦朧として何の為す所もなし。実は中等学校国文教科書編纂の仕事も本年度は昨年度と様子変わり、大体は文部省において編纂委員西尾氏・島津氏と文部省の図書監修官との間にて協議の上決定しており。校正・編集の実際は中等教科書株式会社編集局国語科員の手にて行われ余の手を出すべき余地は殆ど無し。さればこの頃毎日何等仕事の予定もなく出勤しおるにて、不満倦怠言うばかり無し。これ、余が疎開して郷里へ帰るべき機会として与えられたる状態なるべし。

《考察》「実は」と遠慮がちながら現在の境遇を述べる辺りからは、窓際に置かれてしまい、何をすべきか途方に暮れた悲哀感のようなものが伝わってくる。「余の手を出すべき余地は殆ど無し。さればこの頃毎日何等仕事の予定もなく出勤しおるにて、不満倦怠言うばかり無し。これ、余が疎開して郷里へ帰るべき機会として与えられたる状態なるべし。」は、さらに悲痛ともいうべきである。

教材の選定・決定は、編纂委員西尾・島津と文部省の図書監修官との間にて協議。校正・編集は、中等教科書株式会社編集局国語科員が担当。かつてはこれらの編纂過程の要所に身を置いてきたのであった。それがいつの日からか、教材について意見を聞かれる程度になっていったものと思われる。自ら教材案を示すでもなく、また別案を用意するでもなく、さらに原稿を検討するでもないとなれば、確かに居心地の悪い事態であったに違いない。西尾はこの時、どう森下に対したのか。ここで彼の庇護がなければ森下の立場はなくなるばかりである。

1944.8.16

中教会社にて午頃西尾君来たる。中等国文五材料として芳賀矢一先生の「日本国と和歌」なる一文を提示せらる。われら郷里へ疎開し度き考えなる旨をも西尾君に一応話しおきたり。西尾君、もっともの事なれば無理にならぬ様せよといわれたり。

1944.9.5

中教会社出勤。中等国文五審議会の様子をきく。大分変更があった。露伴の「為朝」がやめられて、薄田泣菫の「名器を毀つ」が入り、井上毅の「言霊」がやめられて、出隆の「成りきる心」が入り、狂言の「朝比奈」がやめられて「靱猿」が入った。泣菫の「名器を毀つ」は実にいやなもので、出隆の「成りきる心」も理屈だけのように思われる。変わって変わればえする様には思われない。

《考察》とは言うものの、もはや強力で反対することもせず、また反対したとしてもそれを取り上げてくれるような環境ではなかったのではないか。欲求不満が鬱積するばかりといった状況ではなかったか。となれば、選ぶべき道はただ一つ、次第に方向は固まってきたように思われる。

1944.9.25

中教会社出勤。午後一時半帰る。

《考察》教科書編纂に関するこれ以上の記述はない。「午後一時半」という時間は、かつての「午後五時帰宅」に比して、どう解釈すべきか。

1944.10.1

雨を冒して早朝出掛け西尾君を訪ふ。昨日御弔問の礼を言い、中等国文五の編纂に関する話をなし、疎開に関し相談す。

《考察》「雨を冒して早朝」御弔問の礼とは言え、尋常な時間帯とは言えない。「中等国文」編纂の仕事と「疎開」との間を言ったり来たりしていたのではないか。

1944.10.13

中教会社出勤。中教会社にては中等国文編纂趣意書原稿執筆、抄らず。

《考察》「抄ら」なかったのは、内容的な面からだけか。精神的な側面も、否、そこにこそ大きな原因があったのではないか。

1944.10.26

中教会社出勤。

1944.10.28

十二時中教会社出勤。西尾君来社。午後五時帰宅。

《考察》出社の記述はあるが、仕事の中身については触れられていない。

1944.11.1

中教出勤。中等国文五編纂趣意書原稿作製。

1944.11.26

午前九時出発、杉並区和泉町に西尾君を訪問し、中等国文五編纂趣意書原稿を渡す。

1944.11.27

午前八時岩本町中教会社にゆき、同社に置きたる書物を纏め持ち帰る。

1944.11.29

神田岩本町中等教科書株式会社に至り、今日限り職をやめる挨拶をなし、原稿・書物等を纏めて帰る。

1944.12.27

一〇時四〇分定時に発車す。恐ろしき混雑なり。

1944.12.28

朝七時片桐着。

《考察》必ずしも満足のいく帰郷でなかったかもしれない。なお、これに関連して、西尾に次の記述がある。

そのうちに太平洋戦争が勃発し、空襲が激しくなるにつれ、文化人に疎開が勧められるようになった。国語教科書の編集も停滞がちであった。森下君は郷里に帰ると言い出した。国語編集室もわたしも、それを引き止めることはできないような時局になっていた<sup>5)</sup>。

森下の方から空襲激化を理由に帰郷を言い出したようにも読み取れるが、「森下日記」から判断すると、むしろ直接の理由は、その直後の「国語教科書の編集も停滞がち」、そしてその中身である「森下がこの場に必ずしも必要という状況にない」と把握した森下がやむを得なく決断したとするのがより正しい認識のようである。

こうして森下の『中等国文』編纂作業は終わった。それとともに、『中等国文』が巻五まで刊行されたことから見て（それも見本本のみの刊行と思われる）、この編纂作業そのものも、この辺りがほぼ終結であったのではないかと推測される。

#### 4 「森下日記」(『中等国文』編纂日記)の考察

##### (1) 森下の受けとめ

森下が『中等国文』編纂に従事したのは、1943年4月から1944年10月までの1年半に及んでいる。この間を取り組みへの姿勢について見てみると、次の3つの時期に分けてとらえることができるように思う。

- ①使命感を感じ、意気込んだ時期
- ②困窮したり、怒りを感じたりした時期——好適の教材を見いだせない時の苦しみ。省内審議会に自らは出席できず、間接的に聞くのみ。不満が次第に鬱積してきた。
- ③消沈した時期——帰郷を決意した時。思いのままに

ならない、何ともやり切れない切なさのような感じも持ったようだ。

##### (2) 森下の『中等国文』編纂における役割

編纂の下請け、基礎作業に従事、しかし当初、そのことを承知し、また使命感を帯びてこの仕事に従事したように思われる。決して華やかな舞台ではなかったがこうした下支えの仕事があつて、最初の国定中等国語教科書『中等国文』は出来上がったことがわかる。その意味では、まさに森下は「無名の人」に徹したとも言えよう。自らは公に対して不満も言えず、ただ黙々と仕事に向かう。上部で、反対・拒絶されれば、それに抗することができず（反論ができず）、それに代わるものを提示するしかない。しかもそれを極めて短時間でやり通さねばならない。読書家で、しかも鋭眼の持ち主であったからこそ耐えられた職責であったろう。不平、不満を外に表さない宗教家森下にも、限界はあった。が、それも自ら引き下がるという方法でしか対外的には示すことはできなかつた。それがすなわち辞職ということであった。これはちょうど戦争を「聖戦」と言えずに苦しみ、松本高女校長を退職したそのやり方と同じ方法であった。自らとしては、さぞかし無念なことであつたに違いない。

## 5 まとめと課題

これまで私自身は、『中等国文』は、特にその教材選択に当たっては、五社選定後の岩波『国語』に大きな影響を受けたものと推測していた。が、この「森下日記」からは、そのことに関する記述はまったく見いだせなかつた。ただ岩波『国語』の編集長であった西尾実がこの『中等国文』編纂の中心にいたことは、その推測が大きくは誤っていなかつたことを証左している。

『中等国文』の編纂過程がこうして見えてきたことから、いよいよ『中等国文』そのものの考察（趣旨、内容等）に向かうことができる。

### 【注】

- 1) 森下二郎記・西尾実編『神と愛と戦争—あるキリスト者の戦中日記—』、1974.4、太平出版社 p.260
- 2) 『回想の森下先生』、昭46.6.15、信濃教育会出版部、p.282
- 3) 西尾実「その頃の森下君とわたし」、2に同じ、pp.179~180
- 4) 戦局苛烈、耐乏生活の促進を報じた新聞の切り抜きが添付されたりしている。
- 5) 2に同じ、p.181